

肯定し、探り続けること

——梅崎春生「蜆」論

渡部裕太

1、はじめに

梅崎春生「蜆」は、一九四七年一二月、「文学会議」に発表された作品である。簡単に作品の内容をまとめてみたい。

この作品には、「僕」とある「男」との、四度にわたる偶然の出会いが描かれている。

ある寒い日、酒に酔った「僕」が、省線電車でひとりの「男」と出会う。外套を売って酒に換えた「僕」に、その「男」は自分の着ていた外套を渡す。数日後、ふたたび「僕」と「男」は、今度はバス停で邂逅する。「僕」が着ていた「男」の外套について話しながら、ふたりは終点まで同じバスに乗っていく。それから一週間程して、三度ふたりは出会うことになる。このときは「僕」は渋谷駅で泥酔して眠っており、それを見つけた「男」は「僕」から外套を剥ぎ取って、ふたたび自分のものとするのである。二三日経って四度目に遭遇したとき、「男」の様子はそれまでとは変わっていた。ふたりは喫茶店にはいり、「男」はこの数日にあつ

た「面白い話」、つまり「僕」から剥ぎ取った外套を着た「男」が、満員電車から転がり落ちた「おっさん」をみたことで、偽善的だった自身の生き様を反転させ、闇屋になった、という話を「僕」に語り聞かせるのである。

以上が、「蜆」の梗概である。

この作品は複雑な語りの構造を持っている。作品全体としては、冒頭、「男」と出会う場面を「僕」が回顧して語りはじめる。ただし、作品の半ばから「男」の長い台詞が続き、しばらく「男」が「僕」に一人称で語る、という形式になる。その「男」の語りも、数日前に船橋に行ったときの話から始まり、その途中に「会社に勤めていた時」の解散式の日のエピソードが差し挟まれ、「僕」との邂逅が「男」視点から語り直され、電車内で経験した話、自宅に帰った後の話が続き、最後には「浅墓な善意や義侠心を胸から締出して、俺は生きて行こうとその時思ったのだ」と、「男」の決意が語られる、という錯綜した構造である。「男」の台詞が終わると語り手は「僕」に戻り、しばらく経ったあとの「男」の外套の「黄六角の鈕」の顛末が語られて物語が閉じる。

以上のような語り手の変転に加え、「僕」自体がどのように生きていくのが作中ほぼ示されないこともあって、「蜆」という作品世界から語り手「僕」を読み出すことが困難になっている。こうした複雑さからか、「蜆」はこれまで、梅崎春生の思想の、あるいは敗戦後日本の思想の表象として読まれてきた。

古閑章は、梅崎のエッセイ「エゴイズムに就て」²が「蜆」のバックボーンにある」と指摘し、「口先だけの善意など無力であり、悪に徹する生き方の自覚にこそ、戦後世界を前進させる哲学がある。『欺瞞の否定としてのエゴイズムの肯定』——これはある意味では、坂口安吾の『墮落論』(『新潮』昭21・4)の主調音でもあった」と、坂口安吾と梅崎の思想とを結びつける。さらに、作中の「男」から「羅生門」の下人の姿が彷彿させられる」とし、「両作ともに、小説の設定としての社会的混乱や人心の乱れに、現在及び将来の『飢え』の一項を付加することで、そこに主人公の心理の変化(悪(エゴイズム)の逡巡から悪の肯定)を大胆に展開した作品世界を現出している」と論じている。

三浦和尙は、「時間的な流れが「僕」と「俺」で交錯する」と語り手が「途中完全に「俺」に取って代わる」ことを指摘し、その結果「プロット自体が分かりにくくなっていることは事実である」と論じる。その上で「俺」がたどり着いた思念はおそらく、人間の無意識のなかにある悪意の認定であり、本質的な善意の否定である」と論じ、「こういう現実認識・人間認識は戦後という時代背景の中では特に珍しいというものでもない」と評する。太宰治や坂口安吾を例として提示し、それらが「戦争を経た日本人の共通する意識の代弁」であるとしている。

戸塚麻子は、古閑も参照した「エゴイズムに就て」を再検討し、梅崎は「絶対的な物資の欠乏、特に食料不足という、戦中とはまた異なった新たな極限状態の中で、人が餓死することなく生存を保っているとするれば、それは例外なく他人の犠牲の上に成立しているのだ」と考えていた、と論じている。また、「他人の犠牲の上」に生活するような「ニヒリズム」をこまかすことが「贖」であると意識していたとし、「単純な二項対立、すなわち、エゴイズム否定Ⅱ「偽者」に対し、エゴイズム肯定Ⅱ「眞者」という図式」が梅崎の認識の中にあつたとして、「蜆」にはその「図式」を具体化した「生のあり方」が展開していると述べている。戸塚は、「僕」が「絶望を「退屈」にすり替えることによつて身を処するニヒリスト」であるとし、「このような語り手を設定することの中には「僕」のそれより一層ねじれた、作者の高次のニヒリズムが存在している」とする。「この世の現実をそれとして諦めること」も、「他人や社会との関係を回復すること、即ちニヒリズムを克服すること」も出来ない梅崎の「高次のニヒリズムⅡイロニー」が、「蜆」を規定していると論じている。

戸塚の作家論的な読解を踏まえた上で、藤原耕作は「倫理」という視点から眺めたとき、私はむしろ逆に、「虹」の方が多くの可能性を蔵した作品であるのに対し、「蜆」の結末部はその可能性を矮小化する方向にあると考える」と批判した。古閑、三浦と同じく坂口安吾との共通性を挙げ、「梅崎文学における(倫理)の問題は、『墮落論』におけるそれと、きわめて本質的なところで交差している」として、生きるための「エゴイズム」の肯定を梅崎文学の本質と評した。

日常的な倫理観という「壁」を乗り越え、善悪未分の混沌へと身を投げる行為は、確かに「闇屋」に身を落とす結果となるかも知れない。しかし、私たちの生の現実から遊離してしまったモラルを、もう一度生き生きとしたものとするためには、それがたとえ実を結ぶ可能性が少ないにしても、「奈落」へと身を投げ、善悪未分の混沌をくぐり抜ける覚悟が必要なのである。それを単純に「平凡な闇屋」になる行為だと矮小化することは、悪しきニヒリズムだと言わなければならない。(倫理)を根柢から鍛え直す機会を奪ってしまうからだ。

「蜷」の結末部で「私」が男を評した「平凡な闇屋」ということばを藤原は取り上げ、「悪しきニヒリズム」だと断じている。登場人物に「ニヒリズム」を読み込み、作品の主題に「エゴイズム」の肯定を置くこれらの読みは、確かに終戦後の日本の雰囲気を反映した読解といえるかもしれない。だが一方で、分析の対象は「男」の語りとその内容に集中し、本来の語り手である「僕」への分析は戸塚がわずかに、作家梅崎春生と重ね合わせる形で行っているのみである。

作品全体の語り手「僕」が、どうやって生計を立てているのか描かれないこと、つまり、「僕」自身が「エゴイズム」の肯定を行いながら生きるような描写が一切無いことは、ほとんど注目されてこなかった。「男」の話が焦点化され、その告白の内容が作品の主題として解釈されてきたのである。

そこで本稿では、「蜷」の語りの構造を検討しながら、そこに隠された「僕」による統制を確認するところからはじめたい。

2、語りの構造

「蜷」は、「その夜僕も酔っていたが、あの男も酔っていたと思う。」という一文から始まり、「黄六角の釦」を下宿の子供が「お弾きにして遊んでいるのを三度見かけたが、この頃は見ないようである。もう飽きたんだと思う。」と記述して終わる。作品全体が「僕」の回想として書かれていることを確認したい。

この物語の構造が複雑にみえるのは、途中に「男」の語りが差し挟まれるからであり、三浦が指摘したとおり語り手が「途中完全に「俺」に取って代わる」のだと読まれてきた。確かに作品全体の文量の約半分は、「俺」を一人称とした「男」の語りを直接話法で描いたものである。だが、その「男」の語りが「僕」によって回想され、語り直されているそのことは、これまで問題とされてこなかった。語り手が「僕」から「俺」へと変わる、その箇所を確認しておこう。

男が行こうというので僕も連れ立って街角の喫茶店に入つた。珈琲を注文しながら僕が聞いた。

「翌日船橋に行くと言ってたが、行ったのかね」

「行つたよ。話は其処から始まるんだ」と彼が答えた。以下が珈琲をすすりながら彼が物語った話である。――

「以下が珈琲をすすりながら彼が物語った話である」という記述が示しているのは、この後に続く鉤括弧付きの彼の長い語りを「僕」が回想として再構築している、という事実である。「蜷」という物語が全体として回想によって語られる物語である以上、この「男」の「物語った話」もまた「僕」という語り手による物語の一部であり、会話文体で書かれながらも、「僕」による編集を免れ得ない語りなのである。

それを端的に表すのが、「男」の「物語った話」のなかに登場する以下のような記述である。

あののんびりした声だった。どっと笑い声が上がった。俺の近くでも皆笑った。就中あの女は（おつさんに代って貰ったあの娘だ）キイキイと金属的な笑い声を立てて笑いこけたのだ。

「男」の「物語った話」は、会話文として、鉤括弧付きで語られた話である。にもかかわらず、そのなかに○記号で注釈が差し挟まれてしまう。また、次のような記述にも「僕」の編集の痕跡はみえる。

家に着くと女房が出て来た。俺の女房というのは至極無感動な女で、何事にも驚いたためしがないのだ。俺がかついで来たリユツクを聞いて、あら、ひじみだよ。と落ち着いた声で言った。

この後も、傍点付きで「しじみ」「ひおしがり」などの記述が登場する。これらの注釈や記号の含まれる「男」の語りは、純粋な「男」の直接話法ではありえない。一人称が入れ代わることで複雑な構造に見えていたこの作品は、実のところ、すべてが「僕」によって語り直された、回想の小説なのである。

こうして捉え直すと、古閑や三浦が指摘したような「男」の「エゴイズム」、つまり同時代に流行した「墮落論」的な思想を、「僕」は一度は受けとめ、それを語り直した、ということができらるだろう。

ここに、ひとつの疑問が生じてくる。藤原が強烈に批判したように、「僕」はその「男」について、「彼はその後平凡な闇屋になっただろうと思う。会いたい気持も別段起らない」と語る。「男」の話をこれだけ長くまとめ、記述した「僕」が、直後にその思想を「矮小化」してみせた、その意図はなんだったのだろうか。これを確かめるために、まず「男」の「物語った話」の内容を詳細に追い、それを聞いたのちに「僕」に起こったことを確認したい。

3、「男」の話

「男」の「物語った話」は、「男」が職を探しに船橋に行った、というエピソードからはじまる。友人に職の紹介を断られた「男」は、道端で商売をしている闇屋をみながら、思わず「一層のこと闇屋にでもなつたらか」と呟き、「愕然」とする。

「男」が「愕然」としたのは、「その言葉を現実^①に裏打ちするような兇暴なものが、その時俺の心の中にはつきり動いているの

が判つたからだ」とされている。というのも、「男」はそれまで、「闇屋に落ちるには俺は良識や教養があり過ぎる」と自認していたのである。

この、「良識や教養があり過ぎる」という意識は、「僕」と「男」の、二度目の邂逅で、すでに描かれていた。

「口惜しがるのは止せ。欲しければくれてやるよ」

「俺は他人の慈悲は受けん」と彼は憤然とした口調で答えた。

「俺は物貰いじゃない」

「じゃこの外套は永遠に俺のものだな」

「そう簡単には行かん。俺が欲しくなれば、お前から貰うのは厭だから力づくで剥取るよ」

「へへえ」と僕は少し驚いた。「この前の口吻とは打って代つた転向だな」

「そうよ。俺はお前の言うような星董派じゃない」
成程あれに拘泥っていたのかと僕は気がついた。

「星董派」という言葉は、一度目の出会いのとき、「男」から外套を譲り受けた「僕」が発した、「お前も星董派だな」という発言によるものである。この言葉は、単に浪漫主義者を意味するものではない。背景には、加藤周一が「新しき星董派に就いて」で行つた批判が想起される言葉なのである。以下に引用してみよう。

此処に、寸毫の良心の呵責を感じることなしに、最も狂信

的な好戦主義から平和主義に変わり得る青年、(中略) 充分に上品であり、誠実であり、私の如き友人に対してさへ遺憾なく親切でありながら、(中略) 例へば彼の父の如き軍国の支配階級の犬共が搾取し、殺戮し、侮辱した罪なき民衆に対しては、全く無感覚な青年がある。しかもこの青年は決して例外でない。

彼を産んだのは戦争の世代である。新しき星董派は時代の流行病である。一九三〇年代、殊にその後半に廿代に達した都会の青年の多くは、多少とも此の様な傾向を示してゐる。

加藤は「星董派」の思想について、さらに次のように批判を重ねる。

我々は、今や、安全な哲学が哲学でないことを知つてゐる。(中略)「方法敘説」の著者が云つたやうに、危険な「人生を確実に歩むために真を偽から区分する」ことを教へるのが哲学である、「ドイッチェ・イデオロギー」の著者が云つたやうに、「解釈するのではなく、改造する」ことを目的とするものが思想であることを知つてゐる。現実に対して無力な哲学、歴史を判断することの出来ない思想、——要するに、星董派の持つてゐるものはそれだけであり、良家の子弟は、安心して「不安の哲学」や「危機の神学」の噂話をしてゐたにすぎない。

こうした加藤の批判を踏まえた上で、「僕」は外套をくれた

「男」に「星董派」という言葉を投げかけているのではないだろうか。さらに「男」も、それを正しく受けとめ「俺はお前の言うような星董派じゃない」と返答する。このやりとりの背後には、まさしくふたりの「教養」が隠れているのである。

さて、「男」は、闇屋になるという思いつきが現実感を持って迫ってきた原因について、「贓品を身につけている」という意識であると語る。前夜に「僕」から剃ぎ取った外套を身につけている、ということが、「良識や教養」があるという自意識を超越して「男」に「ある荒んだ勇氣」を与える。

古閑は、この「追剥」という「男」のありかたや、「ある荒んだ勇氣」という表現から「羅生門」を連想しているが、「勇氣」が湧くことで追い剥ぎを行う「羅生門」よりもむしろ、身につけた〈外套〉に併せて内面が変化する造型として、ゴーゴリの「外套」との類似性が指摘できるかもしれない。

ともかく、「男」はその外套を「鎧のように厚ぼったく頼もしく」感じながら、電車に乗り込むことになる。

電車内の様子と、そこに乗り込んだ時の「男」の内面とが錯綜して描写されるが、まずは「男」の内面描写から追いたい。

ぐにやぐにやる老人の体を苦勞して運びながら、俺は何の情熱でこんなことをしているのかとふと疑う気が起った。

しかし俺は唇を噛むような気持で、自分にその時言い聞かせた。善いことのみを行え。悪いことから眼をそむける。困

た人を見れば救ってやれ。人に乞うな。人から奪うな。人にとってを与えよ。——そう口のなかで繰り返して呟きながら

俺は何の喜びもなく老人の体を運んでいた。ほんとに何の喜びもなく！

「男」は会社の解散式での出来事を、このように思い出していたと語る。そして、「もう一度何かを確かめたかった」から「僕」に外套を与えたのだという。

この部分は、「男」のそれまでの「哲学」が最も端的に披瀝されている箇所である。「星董派」という言葉、つまり「現実に対して無力な哲学」という批判は、このように「男」が思い悩んでいた時に投げかけられた。外套を与えた直後、「男」が「ふと顔を上げて聞き答める表情」をしながらもそれに反論できなかつたのは、「男」のなかの「もやもやしたもの」が判然としないままだったからである。

「翌朝俺が外套の件で後悔したとお前は思うか」と問いかけながら、「男」はその答えを語らない。が、「僕」と「俺」との二度目の出会いのとき、「僕」が「この間の口吻とは打って代った転向」だと驚いたように、その時には既に、「男」から「人から奪うな」という「哲学」は失われている。「星董派」という評価を否定し、「現実に対して無力な哲学」を棄てた「男」に残っているのは、「俺は物貰いじゃない」という自尊心のみである。

さらに、三度目の邂逅、「男」が「僕」から外套を剃ぎ取った時、それが語られる。

お前からあの時、追剥だと言われた時、俺は実は身体のすくむような戦慄が身体を奔り抜けるのを感じたのだ。しかしそ

れが擬似の戦慄であることを、俺はその瞬間でも意識していた。だつてもともと俺の外套だからな。そして、これが大事なことだが、その戦慄は贗物であつたにしろこの俺にはぞつとするほど気持が良かったのだ。その感じは、実に俺にとつて新鮮極まるものだった。

「擬似の戦慄」が「贗物であつたにしろ」気持ちのいいものだった、という「男」の描写は「僕」と「男」が出会つたときの会話と対応関係にある。ここでは「酔い」を巡つての会話がなされていた。「清酒を飲まずに代用焼酎で我慢しようという精神は悪い精神だ」と批判する「男」に対し、「僕」は「酔いは本物だ」と返答する。そして「僕」は、「にせものを見ていることが退屈だ」と語り「退屈」だと酒を飲むこと、「酔いだけは偽りない」「酔つてる間だけは退屈しない」ことを主張していた。

「酔い」にしても「戦慄」にしても、思想、思考の枠組みから外れた、身体感覚として察知されるものである。そうした感覚こそが、「贗物」を超える契機となりうる。「だつてもともと俺の外套だから」という理屈の通じないところに生じ、真／偽の判断を超えて、「男」に快感を覚えさせるのである。

こうしたことを、「男」は満員電車のなかで考えていた、とされている。ここからは、電車内での出来事の描写を辿つていこう。

「男」が乗り込んだ満員電車には扉がなく、扉口には「闇屋らしい若い女」がいたが、「義侠心の過剰な」、「頑丈な四十位のおっさん」が、「俺が扉口の栓になつた」と申し出て交替する。「男」は「おっさん」と「身体を接する」位置に立っていた。

電車が一層混み合つて、「男」の肩が「おっさん」の胸を強く押し、「おっさん」は真鍮の棒を必死に握り、「明かに笑おうと努力」していたとされる。それを見た「男」は、「人間の自尊心というものはおそろしいものだな」と語る。

「女」を助け、満員電車の圧迫の苦痛の中で笑おうとする「おっさん」の姿は、「何の喜びもなく」善行を行う「男」のありかたと重なり合っている。また、「女」の「スカートを捲れたままに押しつけられていて、白い腿が俺の眼に見える」という描写が差し挟まれることで、「おっさん」の「義侠心」が「若い女」に向けられたものであることが浮かび上がっている。

電車の揺れと、満員電車の圧力によって、「男」が「危うく扉口に抱きついた瞬間」、「おっさん」は車外に放り出される。

突然強烈な反動がぐつと起り、俺も危うく扉口に抱きついた瞬間、力余つた俺の肩がおっさんの身体を猛烈に弾いたのだ。あつという間もなかった。血も凍るようなおそろしい瞬間だった。おっさんの指は棒から脆くも外れ、必死の力で俺の外套の胸をはいた。思わず俺は片手でそれをはらいのけたのだ。

「おっさん」を車外にはじき出したのは「男」の肩であり、「おっさん」が最期に伸ばした手をはらいのけたのもまた、「男」である。電車の揺れ、満員の圧力という要因はあるものの、「おっさん」が落ちることになつた直接的な原因は明らかに「男」にあるのだ。だが、「男」は「おっさん」を落とした、とは決して語

らない。どころか、「芋虫のように転げ落ち」たとして、笑うのである。

「俺は可笑しくはなかった。しかし笑いがしゃっくりのように発作的にこみ上げてくるのだ」という「男」の「笑い」は、先に確認した「擬似の戦慄」とおなじように、理屈を超えて、直接に身体に表れた「笑い」である。「男」が「おっさん」を弾き出した、という事実は、身体感覚として表れた「笑い」によって、理非を超え、「芋虫のように転げ落ち」た、という認識へと転換している。その認識が「擬似の戦慄」のように「贗物であったにしろ」、その真／偽を超越する身体感覚である「笑い」によって正当化されているのである。

その後、「男」は「おっさん」のリュックを担いで帰宅する。「女房」がリュックのなかをみて、はじめてその中身が覗だったことを知る。「男」は蒲団の中で、出来事を振り返りながら、「何の背徳感も感じて」いないこと、そして意識的に「一緒に転落しようとしたリュックを脚で押さえた」ことなどを考える。

今俺の頭の中で、あのおっさんと、殴られた会計係と、ケラケラ笑い続ける娘と、お前と、それから俺を取巻く色んな人と、俺をも含めた一つの系列が、平面の中の構図として、俺に働きかけて来るのだ。俺は布団の中で眼を堅く閉じ、瞼の裏に咲乱れる眼花をじっと追っていた。

「男」は、自身と取り巻く社会とを「平面の中の構図」として捉えている。そして、その思考は深化する前に、「プチプチとい

う幽かな音」によって遮られる。その音は覗の鳴き声である。その音に聞き入りながら、「男」は次のように考える。

おほろげながら今掴めて来たのだ。俺が今まで赴こうと努めて来た善が、すべて偽物であったことを。喜びを伴わぬ善はありはしない。それは擬態だ。悪だ。日本は敗れたんだ。こんな狭い地帯にこんな沢山の人が生きなければならぬ。リュックの覗だ。満員電車だ。日本人の幸福の総量は極限されてんだ。一人が幸福になれば、その量だけ誰かが不幸になっているのだ。丁度おっさんが落ちたために残った俺達にゆとりができたようなものだ。俺達は自分の幸福を願うより、他人の不幸を希うべきなのだ。ありもしない幸福を探すより、先ず身近な人を不幸に突き落すのだ。俺達が生物である以上生き抜くことが最高のことで、その他の思念は感傷なのだ。鉤を握った死体と、啼く覗と、舌足らずの女房と、この俺と、それは醜悪な構図だ。醜悪だけれども俺は其処で生きて行こう。浅墓な善意や義侠心を胸から締出して、俺は生きて行こうとその時思ったのだ。――

この「男」の宣言には、多くの問題が含み込まれている。これまで見てきたことを足がかりに、この宣言を分解してみよう。

まず、「喜びを伴わぬ善はありはしない」という認識についてである。これは、「擬似の戦慄」や「笑い」のような、理屈を超える身体感覚としての「喜び」が生じない「善」を、「偽物」と断ずることばである。「僕」から外套を剥いだことで気持ちの良

い「戦慄」を、「おっさん」を突き落とすことで辛抱できない「笑い」を経験した「男」は、身体感覚で真／偽をはかるようになっていく。

では、「日本は敗れたんだ。こんな狭い地帯にこんな沢山の人が生きなければならぬ」という認識はどうか。

戦後日本の国土を「こんな狭い地帯」と呼ぶ「男」の感覚は、「東亜共栄」を謳い植民地政策を進めた戦中日本の地理感覚からしか生じ得ない。「日本人の幸福の総量は極限されてんだ」という「男」の嘆きの中には、「日本人の幸福の総量」が本来は植民地という（広い）地帯から無制限に搾取できた、という発想が隠されている。「星蕪派」から意識的に「転向」したはずの「男」は、それでもなお、まさに加藤が批判した「軍国の支配階級の犬共が搾取し、殺戮し、侮辱した罪なき民衆に対しては、全く無感覚な青年」であり続けているのだ。

また、「日本人の幸福の総量」を「極限」する存在、すなわち占領国Ⅱアメリカについては、作中何ら記述されることがない。「リュックの蜆」がリュックに詰めこまれ売られ食われることそのものに不平を言えないように、敗戦後日本を生きる「男」もまた、「幸福の総量」を制限するアメリカへの批判、「幸福の総量」を「極限」されることそのものへの批判は口には出来ないのだ。

さらに「男」は、満員電車で「おっさん」を突き出したように、「先ず身近な人を不幸に突き落すのだ」と語る。このことから「男」が、「極限され」た枠内での「幸福」の奪い合いを決意していることが判る。そうして「身近な人を不幸に突き落す」と決めた「男」の「構図」のなかには、突き落とされた「おっさん」

と、そこから奪い得た「幸福」である「蜆」と、「女房」と自分しか居ない。一時は「あのおっさんと、殴られた会計係と、ケラケラ笑い続ける娘と、お前と、それから俺を取巻く色んな人と、俺をも含めた一つの系列」として浮かび上がっていた「構図」＝社会認識は、「男」が「外枠」による制限を意識したことで、この最小限のかたちに縮小され「醜悪な構図」として認識されるようになったのである。

4、「僕」の反応

「男」の長い語りは以上のように成立していた。これを踏まえただ上で、はじめの問いに戻ろう。それは、この「男」の話を再構成した語り手「僕」が、その内容をいかに捉えたのか、という問題である。

「——お前が言う程の面白い話でもなかったが、しかしまあ退屈はしなかったよ」と僕が言った。「お前の新しい出発について、俺はこの冷えた珈琲で乾杯しようと思うよ」

これが、「男」の話が終わった直後の、「僕」の初発の感想である。「僕」は「退屈はしなかった」といい、「冷えた珈琲で乾杯」しようとする。先にも確認したように、「僕」は「にせものを見ていることが退屈」だと語り、「退屈」だと酒を飲む、とされていた。「冷えた珈琲」で済ませようとしたことから考えても、「僕」は「男」の話と決意を、「にせもの」ではない、と認めていたこ

とが判る。

ところがここから、「僕」の「男」への感情は、「会いたい気持ちも別段起らない」へと変化する。その間に起こっているのが、「男」が外套を売ることであり、いくつもの「蜆」が発見されることであり、そしてそれを肴に両者が痛飲する、ということである。

「男」が「こんな鎧は必要じゃない」と語り、外套を売り払って飲もう、と「僕」を誘ったとき、「僕」は「しかし売るについては、その前にその外套をも一度だけ俺に着せてくれないか」と頼む。「男」が「鎧」とよぶ外套を着てみた「僕」は「あの柔かい重量感がしっかりと肩によみかえって来た」のを感じる。本来「男」のものだった外套は、一度「僕」を経由したことにより、「男」にとつては「鎧」として、「僕」にとつては「柔かい」外套として感ぜられるようになっていく。外套のポケットのなかの「蜆」に「男」が気づかなかつたのは偶然ではない。外套を硬い「鎧」ではなく「柔かい」ものとして身につけることの出来る「僕」だからこそ、硬い「蜆」に気がつくのである。

「蜆」はいろいろな場所から、幾つも発見される。「男」がそれをみて「一寸厭な顔」をするのは、「男」にとつて、「蜆」が単なる食べ物でも、売り物でもないからだ。

「男」が「日本人」を「リュックの蜆」に喩えていたことは既に述べた。「身近な人を不幸に突き落とす」という決意が正当化されるのは、「幸福の総量」がリュックのような〈外枠〉によって制限され、そのなかで生きねばならない、ということが前提とされていることによる。ところが、いつのまにかリュックから逃げ出し、外套や背広に忍び込んでいた「蜆」たちは、その〈外枠〉

の絶対性を揺るがせにかかる存在といえる。ここでは、「男」の社会認識からはみ出す生き方、そのような人間の存在が、「蜆」に象徴されるかたちで語られているのだ。そして、それを発見することができるのが「僕」なのである。

「エゴイズム」の肯定という同時代的な思想は、敗戦により日本が帝国主義国家から被占領国へと変転したことによって生じた、価値観の転倒の結果である。「日本人の幸福の総量は極限されてんだ」という「男」の語りのなかには、「幸福の総量」を「極限」する〈外枠〉、つまりアメリカと、それに「極限」される被占領国日本という国家の構造が、逃れがたい呪縛として屹立している。その「改造」不可能な〈外枠〉の構造が、「男」に社会認識の「解釈」の変更を迫つたのだ。「僕」は「男」の体験と宣言が「本物」であることを認めた。「エゴイズム」の肯定、という方法を否定せず、それに「乾杯」してみせようとしたのである。

一方で、その直後に「僕」が掴み取つた「蜆」は、それとは全く別の生き方を露呈させている。〈外枠〉から抜け出すこと。枠内で生きるために堕ちる、というような単純な発想ではなく、その〈外枠〉そのものの絶対性を疑い、すりぬけること。その外側に自己を立ち上げ、誰も知らない新しい生き方を生きて行くこと。出て来た「蜆」で味噌汁をつくらせたことが描かれるのは、それが、〈外枠〉から飛び出た「蜆」が干からびることなく生きていたことを示すエピソードだからであり、「蜆」そのものが酒を飲む「僕」にとつての救いとして機能するからでもある。

このように捉えることで、「男」への「彼はその後平凡な閨屋になつただらうと思う。会いたい気持ちも別段起らない」という反

応が、決して「矮小化」などではないことが明らかになるだろう。

「僕」は「男」という同時代人が辿ったある種典型的な、「平凡な」思想の変遷をみつめ、それを肯定する。さらにその上で、リユックからはみ出して生きていた「蜆」を、すなわち〈外枠〉から外れたところで生きることの可能性を、発見したのである。

このように、「男」と「僕」との間の認識にずれが生じたのは、「男」が外套を「鎧」として、おなじく硬い殻をもつ「蜆」を「日本人」として捉えたのに対し、「僕」は外套を「柔かい」ものとして捉え続けた、という認識の違いに依るところが大きい。〈外枠〉を絶対化する「男」は、外套を自身と周囲とを固く閉ざす境界として見出し、〈外枠〉を疑いうる「僕」は同じ外套を「柔か」く受けとめるのである。〈外枠〉と外套とは、その意味で、対応関係にあるといえるだろう。

最後に、外套の「黄色い釦」について考察してみよう。

5、外套と釦

「男」が最初に外套を「鎧」と認識するのは、「俺は贓品を身につけているのだぞ」と呟いた、そのときである。「男」が「鎧」としての外套に併せて内面を変化させ、「ある荒んだ勇氣」を得たことは既に触れた。ではなぜ、「追剝」した外套は「鎧」として認識されるようになったのだろうか。

それまでの「男」の生き様については、次のように語られる。

会社に勤めていた時、俺は真面目な会社員だった。俺は良

く働いた。俺は悪いことをしなかった。誰からも後ろ指をさされなかった。俺は適度に出世し皆からも好かれた。(中略) 解散のどさくさで誰が何を持ち出した、誰がいくら胡麻化したと、酔いが廻るにつれて暴露し合い出して、最後の時分は宴席のあちこちで殴り合いさ。浅間しいもんだ。俺の馬鹿正直な性格は誰も知ってるから、俺には何とも言いやしない。

「真面目」で、「悪いこと」をせず、「馬鹿正直」な性格で知られ、宴席で「殴り合い」が起きるような時でも何も言われない。「男」には、「善いことのみを行え」という「哲学」こそが身を守る術であり、「鎧」は必要なかったのである。

ところが「追剝」したことで、「善いことのみを行え」という「哲学」は破れ去り、身を守る「鎧」が必要となった。そしてその感覚は、善意によって行動した「おっさん」が電車から弾き出されて死んだのをみたことで、より強烈になる。「おっさん」の死には、「おっさん」自身の過失も、それどころか何者の悪意も介在していない。「善いことのみを行え」という「哲学」は、身を守る術たりえないのだ。

自身が信奉してきた善意なるものが、決して自身を守らないことに気が付いた「男」は、「贓品」の「鎧」に併せて内面を変化させ、「他人の不幸を希う」ようになる。この変化が訪れたことで、「男」は藪のように自身を守り自身を矯正していた「鎧」を脱ぎ捨てることができるのである。

一方で、「僕」にとつては、外套は外套でしかない。はじめて着た時から「俺のために仕立てたと思う位」に身体に合う外套

は、最後まで「僕」に、「柔かい重厚感」を与えてくれる。「僕」にははじめから、身を守る「鎧」は必要とされていないのである。だが一方で、「取れかかっていた釦」については、「僕」はそれを引きちぎって持ち帰る。「黄色い釦」を検討することで、「僕」が求めていたものを明らかにしてみたい。

「黄色い釦」の来歴を「僕」が知るのには、「男」との二度目の邂逅のときである。

「この釦は俺の祖父さんが、撃取った鹿の骨だ。九州は背振山よ。六角形してるだろ。いい職人だったぜ。そこらの釦とは違うんだ」

「お前の祖父さんが獵師だったとは知らなかったよ」

このときの「男」の語りは、誇りに満ちている。祖父が鹿を撃ち取ったことを誇り、九州男児であったことを誇り、いい職人でもあったことを誇る。こうして導き出されたのが「そこらの釦とは違うんだ」という説明なのだ。つまりこの「黄色い釦」は「男」にとつて、自身の出身、ルーツに対する誇りの象徴なのである。こうした「男」の自尊心のありようは、「善いことのみを行え」という倫理的な、そして旧時代的な「哲学」と呼応している。

ところがそれを聞いた「僕」は、「祖父さんが獵師だったとは知らなかったよ」とやり返す。この時「僕」と「男」は会うのも二度目で、「男」の祖父のことなど「僕」が知るはずもない。「僕」は、「男」の語りに感じとつた誇りからあらゆる要素を捨象し、「獵師」に差し戻した上で「知らなかったよ」と冷やかすのだ。

四度目にふたりが会ったとき、「男」の外套は「釦の中のひとつは剥ぎ取られ、ひとつぶらぶらと落ちかかっていた」ような状態だった。剥ぎ取られた釦は、「おっさん」の手の中にある。「男」からその話を聞いた後「僕」は取れかけていた釦を引きちぎる。

「男」が「黄色い釦」に仮託していたのは、先祖の誇りであり、自身の出自の誇りであり、「善きことのみを行え」という「哲学」だった。そして「義侠心」あふれる「おっさん」は、その象徴たる釦を引きちぎって死んでいった。「僕」が「黄色い釦」を引きちぎって持ち帰るとき、その所作は、「おっさん」の模倣として立ち現れるのである。

「僕」は「リュック」から飛び出た「蜷」をみたことで、「幸福の総量」を制限する〈外枠〉から逸脱することを考えている。その視点から見れば、「満員電車」から飛び出した「おっさん」は、ひとつの達成なのである。

「男」が捨て去った誇りの象徴、「哲学」の象徴を握りしめた「おっさん」が、〈外枠〉の外側へと到達したこと。そのことが、はじめに「男」の誇りを冷やかしてみせた「僕」に、「黄色い釦」という誇りの象徴を引きちぎって所有する欲望を喚起したのだ。

ところがその後、「僕」はその釦を、「別に用途もないから」と放っておく。「僕」は〈外枠〉からの逸脱を考えているが、「黄色い釦」を握りしめる「おっさん」のありかたの模倣が導くのは、「芋虫のよう」な死だ。「男」が捨て去り、そして「おっさん」が最終まで握りしめた「黄色い釦」を、「僕」はもてあますのである。

最終的に釦は、「下宿の子が来て玩具にくれ」ということで、「下

宿の子」の手に渡り、「おはじき」の代用品として何度か遊ばれ、「もう飽きたんだろうと思う」と語られる。

「僕」は結局、誇りの象徴である「黄色い釦」を手放す。「僕」には「用途」がなかった、つまりはそれを握りしめながら新しい生き方を模索する方法が見当たらなかったのだ。だが「僕」はその釦を捨てることなく「下宿の子」へと引き渡す。引き渡された誇りの象徴は、「玩具」にされ、「飽き」られながらも、一応は次代へと引き継がれるのである。

6、おわりに

これまでみてきたように、「蜷」に登場する「僕」と「男」とは、考え方を異にしている。「男」の思想は、たしかに先行論が指摘してきたようなエゴイズムの肯定だといえるかもしれない。

一方で「僕」は、そうした「男」の態度を本物だと認めながらも、それとは別の生き方、〈外枠〉から逃れた「蜷」の生き方を、その指先で捉えるのである。むしろそれは、新しい生き方の可能性をみた、ということに過ぎない。作中に「僕」の生活が始ど描かれないことは、「僕」が「蜷」の生き方、誰も知らない新しい生き方を、今まさに探り続けている最中であることを表しているのである。

「おっさん」が電車から落ちたとき、満員電車の車内で起こった「笑い声」は、リュックの「蜷」の「啼声」によって表象されている。

「蜷」は、「幸福の総量」を制限された敗戦後日本を舞台に〈外

枠〉のなかで「啼声」を挙げながらエゴイズムへと突き進もうとする「男」と、その「男」の在り方を認めながらも自身は〈外枠〉から逃れた新しい生き方を考える「僕」という、ふたつの結末が描かれていた。両者は、それぞれが別個の方途によって社会と相対しながら、それぞれの〈人間回復〉を試みているのである。

注

- (1) 古閑章「梅崎春生の世相小説——飢えをキーワードとして」〔近代文学論集〕一九九二年一月
- (2) 梅崎春生「エゴイズムに就て」〔掲載誌未詳〕一九四七年
- (3) 三浦和尙「梅崎春生における「かるみ」——「蜷」の分析をもとに——」〔愛媛国文と教育〕一九九八年七月
- (4) 戸塚麻子「〈贖〉の季節とその超克——梅崎春生『蜷』について」〔日本文学誌要〕一九九九年三月
- (5) 藤原耕作「梅崎春生文学における〈倫理〉——「虹」を視座として」〔敍説Ⅱ〕二〇〇四年八月
- (6) 梅崎春生「虹」〔掲載誌未詳〕、発表の詳細な日付はわかっていないが、全集の改題によれば、「蜷」と「飢えの季節」(一九四八年一月)の中間期に置かれる作品のようだ。
- (7) 「ひじみ」「ひおしがり」という「女房」のことばは、「男」によって「舌足らず」と語られているが、これは江戸弁の特徴である。「山手線」圏内に住みながらそれらのことばを都度都度矯正せねばならない「男」の神経質さが、あるいは自己のルーツを「九州を背振山」に求める「男」の在りようが、この傍点によって浮き彫りにされているともいえるだろう。
- (8) 坂口安吾「墮落論」〔新潮〕一九四六年四月
- (9) 加藤周一「新しき星蕈派に就いて」、初出は一九四六年七月

から二月まで雑誌「世代」に連載された「カメラ・アイ」で、引用は「1946・文学的考察」（富山房百科文庫 一九七七年四月）による。加藤は一九四七年七月には雑誌「近代文学」に「IN EGOSTOS」を寄せ、「素朴な写真家或は記録家にすぎない日本の私小説家が描いた日常のエゴを、人間性の名に於いて称び、人間的現実の根柢などと唱へるのは、アナクロニズム以外のものではない。小説はその否定に出発するのだ。」と「小市民的エゴイズム」を強烈に批判し、「文学が作家の体験から出発する他ないと云ふこと位、明白な事実はないが、作家的体験が日常生活のなかに於けるエゴイズムである場合は、小市民的反動の例にすぎない」と断じていることも指摘しておきたい。それら一連の加藤の論考を受けてか、梅崎は翌八月「世代の傷痕」（新文芸）を發表し「戦後の現在の人間の特色は、つまり自分の心の極限的な可能性を行動で持つて確認し、現在確認しつつあるという点であると私は思うのである。そしてそれは、必ずしも人間のマイナスの部分、悪や利己心のみでなく、真善美に対する極限性でもあることを私は信じるが、しかし後者は実生活を犠牲にすることでのみ追求出来るものであるらしい」と語る。このとき既に「エゴイズムに就て」で語られたエゴイズムの積極的肯定は後景化しているのである。

- (10) デカルト『方法序説』（谷川多佳子訳 岩波文庫 一九九七年）には、「自分の行為をはっきりと見、確信をもってこの人生を歩むために、真と偽を区別することを学びたいという、何よりも強い願望をたえず抱いてきた」とある。これは「蜷」一作品に限らず、占領期の梅崎の著作の大部分に垣間見える、本物／偽物、あるいは真／偽の追求への願望そのものである。

- (11) 「エゴイズム」と「人間回復」とは対立的にみえるかもしれないが、この「人間回復」という結語は、「蜷」の直後に発表

された梅崎のエッセイ「人間回復」（『文学新聞』一九四八年一月）を踏まえてのものである。「人間回復」で梅崎は、「私は自分に絶望している。絶望した形で自分の人性を信じていると行ってよい」として、「自分を救おうとする気持だけが、やがて他を救う気持になってゆくことを私は信ずる他はない」と語る。現在が「いわば穴居時代と大差ない状態」だとして、「われわれはもはや市民ではなく、人類である。人間を回復し、社会をうちたてるため、この現在のスタートラインに立っていることを認めることが絶対に必要」だとする梅崎の主張は、「男」の在り方を認める「僕」の態度と重なり合うのである。

附記

本稿中の梅崎春生の引用は全て、新潮社版『梅崎春生全集 第二巻』による。なお、引用中の傍線は引用者によるものである。

（わたなべゆうた 大学院博士後期課程在学中）